科学技術と想像力

――映画『東京原発』をめぐって――

基礎教育学コース　　今　村　純　子

Science-Technology and Imagination on the Film *Tokyo, Level One*

Junko Imamura

The film *Tokyo Level One* (*Tokyo Genpatsu*) directed by Gen Yamakawa seems for us to make appear the world after March 11, 2011. The intention of the director Yamakawa to produce this film is not to question whether it is right or wrong to use the nuclear power, but to clarify our "indifference" to the danger when we are far from it. Simone Weil, a French philosopher, calls such state of our mind "the illusion of perspective". This article tries to figure out three points: first, this mechanism of our mind has affirmed the nuclear energy policy; second, this mechanism depends on the wrong relation of our desire and imagination; third, how we are able to awaken from this illusion in rearranging such relation.

目　　次

はじめに
１．われイメージする，ゆえにわれあり
２．弱さの強さ
３．「見えない世界」とどう向き合うのか
結びに代えて

はじめに

2002年に撮影され，2004年に公開された山川元（1957年～）監督映画『東京原発』には，あたかも2011年３月11日以降に撮影されたかのような世界が，リズミカルに，ユーモラスに次々と映し出されている。山川監督は，2011年４月７日付の新聞記事で次のように述べている。

> 「映画を作るまで原発のことはほとんど知らなかった。調べてみると，原発の危なさを自分も周りもあまりに知らないことにびっくりした。作品は原発に賛成か反対かを問うているのではない。僕が描きたかったのは身近に恐怖が迫るまで反応しない，人間の無関心ぶりだ」[1)]

山川監督のこの言葉に接するときわたしたちは，「愛の反対は憎悪ではない，愛の反対は無関心である」というマザー・テレサ（Mother Teresa, 1910～97年）の言葉を思い浮かべることができよう。他者に愛を傾けられないということは，すなわち自己自身に愛を傾けられないということである。というのも，「無関心」とは，自らの生を取り巻く世界と他者に対して活き活きとした「イメージ」を抱きえないということだからだ。それゆえ，今日この映画を取り上げ考察する意義は，なにゆえに原子力にかかわる諸問題は，多くの科学者，技術者，そして市民から，その問題について活き活きとしたイメージを抱きうる想像力を剥奪し，思考停止させてきたのかということにあろう。

想像力なくしてわたしたちは真に生きてゆくことができない。すなわち，「生命」ないし「生活」はあっても，「人生」があるとは言えない。それゆえ，想像力が極端に枯渇した時代には，想像力に代わって「想像力の紛い物」を満足させる新興宗教やテーマパークがはびこることになる。2011年３月11日以前においても，「絶対安全」，「核エネルギーの平和利用」といったスローガンにはその言葉の拠って立つ「根」がないことに，わたしたちは――それがたとえ無意識のレベルであったとしても――多かれ少なかれ気づいていたはずである。だがそのことを「見ないように」，すなわち「イメージしないように」，多くの人々は生きてきた。そうして知らず知らずのうちに自らが拠って立つ大地の「根」を失ってきてしまったのである。

映画『東京原発』では，東京都庁の一会議室内で交わされる議論や対話のシーンと，東京都内をモックス

燃料を積んだトレーラーが走るシーンという，互いに異なる位相にあるふたつのシンプルな場面が織りなされている。そして最終的に両者が重なり合うことによって，様々な生活形態をもつ人々が原子力発電という問題にどう向き合いうるのかを問うことで，わたしたちはどのようにして「想像力＝イメージする力」を十全に開花し，真に自らの生を紡ぐことができるのかを描き出そうとしていると言えよう。

本小論では，映画『東京原発』が問うものを抽象することで，その抽象がどのようにして新たな具体へと還元しうるのかを念頭に置きつつ，なぜまたどのようにして科学技術はわたしたちの生に不可欠な想像力を奪い去り，そしてわたしたちはどのようにしてひとたび奪われた想像力を取り戻し，それぞれが自らの生を紡ぐことができるのかを考案してみたい。

1．われイメージする，ゆえにわれあり

高層ビルの上階から地上を見下ろすと，地上を行き交う人々の姿があたかも「うごめく小さな点の集まり」のように思われる。すぐ傍にいれば「生身の人間」と感じられる同一の対象を「距離」とって眺めるとモノとして感じられてしまう。これは何も物理的・身体的な現象に留まらず，心理的な現象においてもそうである。このことをたとえば，ユダヤ系フランス人女性思想家シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil, 1909～43年）は「遠近法の錯覚」という言葉を用いて次のように表現している。

> 「一般にエゴイズムと言われているものは，自己愛ではない。それは遠近法のもたらす結果である。自分のいる場所から見える事物の配置が変わることを人は悪と名づける。その場所から少しでも離れたところにある事物は目に見えない。［フランスから見て］中国で十万人の大虐殺が起こっても，自分が知覚している世界の秩序は何の変化もこうむらない。だが一方，隣で仕事をしている人の給料がほんの少し上がり自分の給料が変わらなかったとしたら，世界の秩序は一変してしまうであろう。それを自己愛とは言わない。人間は有限である。だから正しい秩序の観念を，自分の心情に近いところにしか用いられないのである」[2)]

わたしたちはどのようにしてこうした「遠近法の錯覚」から逃れ，有りのままの世界と他者に向き合うことができるのであろうか。科学，わけても純粋科学はその可能性を解く鍵を与えてくれるであろう。古代ギリシアでは科学の探究が，科学と宗教および科学と芸術との連関においてなされてきた。このことに明らかなように，科学は本来，探究するその人の弱さを知らしめ，謙虚さを促すはずのものである[3)]。だが言うなれば「他を殺して自らが生きようとする」，「力」を探究する技術が科学に結びついたとき，科学者が自らの想像力を奪いゆく，すなわち科学者が科学を放棄するという事態が生じてしまうのである[4)]。

映画『東京原発』はこのことをどう描いているであろうか。奇想天外な天馬・都知事（役所広司）は「緊急会議」と称してある日突然，津田・副知事（段田安則），泉・環境局長（吉田日出子），大野・財務局長（岸辺一徳），佐伯・政策報道局長（田山涼成），石川・都市計画局長（菅原大吉），笹岡・産業労働局長（平田満）の 6 名に召集をかける。そこで知事は「東京に原発を誘致する」という爆弾発言をする。そして東京への原発誘致の意義を，「財政再建」，「環境保護」，「エネルギーの有効活用」といった側面から問いかける。そうして次第に，強烈な個性をもつ 6 人の都幹部たちはそれぞれきわめて矛盾した立場を生きていることに気づかされることになる。

まず物理的な「遠近法の錯覚」についてはどうであろうか。東京から離れた福島や福井であれば原発誘致に賛成しているのに，なぜ都庁の目の前の「新宿中央公園」では駄目なのか，と知事は問いかける。原発が「絶対安全」であり，なおかつ「クリーンなエネルギー」なのであれば，温排水をそのまま都内に循環させ冷暖房の熱源に利用すればよく，またすでに自然のない都会に原子炉を作るのが送電線によるコストや自然破壊の懸念がなくベストであろう。さらに，原子炉が「関東大震災の三倍の規模の地震にも耐える」絶対の耐震性を誇るのであれば，地震の際にはまさしく原子炉のなかに避難すればよいはずである。このとき，「絶対安全」や「クリーンなエネルギー」といったスローガンを彼ら自身けっして信じていたわけではなく，これらは物理的な「遠近法の錯覚」によってきわめてリアリティの薄いものとなっていたことに 6 人それぞれが思い知らされることになる。

次に，心情的な「遠近法の錯覚」についてはどうであろうか。環境局長であれば「環境保護」について，政策報道局長であれば「世論の動向」について，財務局長であれば「財政再建ないし維持」について，否応なく「関心」をもたざるをえない。それゆえ，自然や

世論や財政がまず前面に出され，それらとの関係において原発への賛成・反対の表明がなされることになる。すなわち，彼らの賛成・反対の判断は，個別の利害・関心に基づく判断であって，包括的な判断ではないのである。

映画中盤から，天馬・都知事に代わって，津田・副知事が招へいした物理学の権威，榎本・東大教授（綾田俊樹）が議論の指揮をとることになる。榎本が提供する原発をめぐる知識が6人それぞれの強烈な個性において受け取られるないし反発を繰り返すなかで，原発という「公」の問題がそれぞれの「個」においてイメージされることになる。そしてまさしくこの働きこそが知事の爆弾発言の意図であり，この会議室における「個に映る公」といった有り様が東京都民ひとりひとりに起こり，国民の側から国のエネルギー政策を見直す声が挙がることを知事は見据えているのである。議論が出尽くし，東京原発誘致に賛成か反対かの票が真二つに分かれ，沈黙が訪れる。すると次のシーンが見られる。

天馬「原発を支持する人間は都会に多いのに，なんで環境を破壊する地方にばかり原発を建てるんだ？　海の傍が条件なら東京にだって海はあるぞ。なんで東京だけダメなんだ？　新潟や福島の原発には賛成しているくせに」

津田「別に賛成しているわけでは……」

天馬「じゃあ，なんで傍観者でいられるんだ？　国の政策を傍観しているってのは，賛成しているのと同じことだ！」

榎本「東京原発は，リスクが高すぎます」

天馬「誰にとってのリスクを言っているんだ？」

榎本「それはもちろん，国や電力会社です。彼らは事故と因果関係のある死人の数と保証金の額を，机の上で煙草を吸いながら計算しているんでしょうからね」

天馬「個人が背負う命のリスクは同じじゃないのか？　五千人の村でも，一千万以上の大都市でも，そこに住んでいる住民ひとりひとりにとって背負う命のリスクは同じだろうと言っているんだ！　日本で一番電気を浪費してその恩恵に与っている東京都民がそのリスクを負わずに原発をよその土地に押し付けておいていいのか？」

津田「では知事は原発の危険性を充分認識したうえで，都民にそのリスクを負えというのですか？」

天馬「そうだ。それがいやなら電気など使うな！」

（1:07-1:09　強調引用者）

「傍観と支持は同じである」という天馬・都知事の言葉に接するときわたしたちは「アイヒマン裁判」（1961年）を傍聴し，「服従と支持は同じである」とアイヒマンに述べたハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906～75年）の言葉を想起せざるをえなくなってこよう[5]。この類似点に思いを馳せるならば，戦争においても，国家政策としてのエネルギー問題においても，「他者と世界を活き活きとイメージしえないこと」という意味における同様の思考停止の有り様を見てとることができる。さらに，「傍観と支持は同じである」と認識しうるのは，まさしく自らに不安や恐怖が差し迫った場合に限られる。そして，あらゆる社会問題は「個」において捉えられるのではなければ，ふたたび「普遍」へと回帰する強さをけっしてもちえない。それゆえ知事は，「遠近法」を捨象することによって，「公」の問題を国民ひとりひとりが自分自身の「個」の問題としてイメージし，思考する場を提供するためにこそ，「東京原発誘致」を公言するのだ。わたしたちを取り巻くどのような問題であれ，科学者が科学として，技術者が技術として，市民が生活として，個のレベルで思考し，それを借り物ではない，自己自身の言葉で表現するのでなければ，世界と他者とつながってゆくことはできない。すなわち，それぞれの生が生ではありえないのである。

他方で，この映画のもうひとつの位相である，都内を走るモックス燃料を積んだトレーラーのシーンが果たす役割とはいったい何であろうか。このトラックの運転手はリストラに合った元サラリーマンであり，仕事内容は明かされずに，「通常の三倍の賃金」でこの仕事を引き受けている。同様に，仕事内容は知らされずに，「通常の二倍の賃金」でおそらく放射性廃棄物を運ぶ仕事を終えた直後であり，足早にトラックに乗り込み走り去ろうとするこの男の後ろ姿に積み荷を降ろした先の男は，「賃金が通常の三倍ということは，その分危険も三倍だということだぞ！」と呼びかける。

このトレーラーの運転手のように生活に追われ，原発への賛成・反対以前に，自分がいったいどのような仕事を任されているのかを知らされずに，原発にまつわる仕事に従事する人は少なからずいるであろう。「東海村JCO臨界事故」（1999年）で亡くなった二人の作

業員の方々は，放射能の恐ろしさを知らされずに，充分な安全教育を受けないまま危険な業務にあたっていたという。他方で，「チェルノブイリ原発事故」(1986年）の処理に携わった人々のほとんどが現在，死亡しているか重篤な病に侵されているという事実は，彼らが放射能の危険性を知らされた上でそれでもなお責任をもって事故処理作業にあたっていたわけではないことを物語っていよう。

2．弱さの強さ

映画中盤から天馬知事にかわって情報を提供する榎本教授は，言うなれば「知識」の象徴である。榎本が述べるひとつひとつの「事実」が誰かの心に届き，その人を覚醒させることによって知識ははじめて生きたものとなる。原発が推進されたのが1973年のオイルショック以降ではなく――すなわち，エネルギー危機に直面して推し進められたわけではなく――，1954年の国会終了間際のどさくさにまぎれて，大した議論も批判もなく通過したことを榎本から知らされると，津田・副知事は激昂する。なぜなら津田は広島出身で身内に被爆者をもつからである。1945年の原爆投下から10年も経たないうちに，無反省に，無思慮に原発開発が推進されたことに，津田は我慢ならなかったのである。これは津田が津田自身のきわめて個人的な「痛み」をもって原発を捉えた瞬間であると言えよう。

他方で，「財政」という「公」を「公」としてのみとらえている大野・財務局長の楽観的な態度は，その「楽観的である」という姿勢そのものにおいてきわめて暴力的な様相を呈している。大野の存在は，原爆で傷ついた日本であるからこそ，弱さから脱却する「力」の術として，放射能の実体を把握することなく原発開発が推進されてきた日本の姿そのものを象徴していると言えよう。戦時のみならず，「民主化」されたはずの戦後の高度経済成長期において「われ」という個人は捨象され，「われ」に代わって「わが国」が「われ」のうちに息づいている。すなわち，「われ」の核に据えられた「わが国」は，なんら罪悪感や責任感を有することなく，他者と世界に暴力をふるい続けることができるのである[6]。

榎本教授との議論のさなか，大野・財務局長は高速増殖炉「もんじゅ」を「ああ，もんじゃね」と言い間違える。「高速増殖炉」であろうが「もんじゃ焼き」であろうが，大野にとってはどちらでもよい程度の事柄でしかないのである。そしてこのシーンに接するときわたしたちは，そもそも「もんじゅ」とは菩薩の名であり，しかしそうであるにもかかわらず誰にでも親しみやすいひらがなで表記されているという事実に立ち止まらざるをえないであろう。「もんじゅ」という名には誰にでも容易に手の届く「全能性」が暗示されている。「[高速増殖炉は] 諸外国では危険すぎるので次々に廃止されているのに日本ではどういうわけか固執している」と，榎本教授は述べる。ここにわたしたちは，アニミズムとして神も自然も共に生きる風土である東洋に西洋の技術が導入されたとき，その危険性がなおざりにされ，忘却されてしまう有り様を見ることができよう。それは，第二次世界大戦における数々の戯画的出来事となんら変わることない，自ら判断し行為する個が磨滅した有り様である。映画における会議は長時間におよび，たびたび休憩が挟まれる。三度目の休憩時間には次のような会話が見られる。

泉 「原子爆弾を落とされたこの国が，どうしていまだに原子力を推進しているのか，理解できないわね」
津田「こんな狭い国に50基以上もの原発があるなんて信じ難いですよ」
佐伯「そんなにあるんですか！」
津田「2010年までにあと10基はつくるみたいですよ」
泉 「えっ，そんなに？」
津田「たしかにエネルギー政策は重要です。しかしそのために何万年もの先の未来まで核のごみを残すことになるんですよ。それをわかってやっているのが理解できない」
大野「利権だよ。原発一基に数千億もかかるんだろ。原子力産業にどれだけの企業がぶら下がっていると思っているんだよ。わかっているくせに」
(1:01:51-1:02:47)

上記の対話は，「利権」という大野の言葉に収れんされることになる。そしてこの事態は2011年３月11日以降を生きるわたしたちが日々痛感させられていることでもある。生命よりも，権力・名誉・金銭のほうがはるかにリアリティをもつ世界にわたしたちは生きている。ここにおいて，想像力と欲望の関係が浮き彫りになってこよう。自己拡大の欲望は自らの想像力を殺しイメージを剥奪する。そしてシモ・ヌ・ヴェイユがホメーロス『イーリアス』の主人公を「力」と捉えたように[7]，人をモノとして扱うとき，その人自身がモ

ノと化している。それはときには自らの生命を賭してでも科学技術の進歩に与したいとする人間の姿に重なる。だが忘れてはならないのは，人間の生み出した科学技術はあくまで有限のうちにあり，無限へと転換させられることはない，ということである。それゆえ有限のうちに無限を探究するという「欲望の転倒した体制」を立て直すためにこそ，「想像力＝イメージする力」が不可欠なものとなる。

3.「見えない世界」とどう向き合うのか

この映画では，会議室で天馬知事が煙草を吸い，泉・環境局長が「知事，禁煙です！」と苦言を呈する場面がしばしば見られる。煙草を吸う姿や煙草の煙は目に見えるので，「有害なので別の場所で吸ってください！」と堂々と公言することができる。だが放射能の脅威とは，まさしくそれがわたしたちの目の前にあらわれてもまったく目に見えず，耳に聞こえず，手に触れられないということである。そうであればなおのこと，放射能を正確に把握するために「想像力＝イメージする力」が不可欠なものとなってこよう。

コメディに分類されるこの映画に散りばめられている数々のユーモアや可笑しみは，原発という深刻な対象から距離をとって，冷静にその対象を見つめることを観る者に可能にさせている。会議のさなか天馬知事と携帯電話でやりとりをしている原子力の「専門家」とされる原子力安全委員会の松岡（益岡徹）は，モックス燃料を東京湾からトレーラーで福井に運ばせようとしている。天馬は松岡と次のようなやりとりをする。

［……］

松岡「そうなんですよ。地球上の人類を何回も皆殺しにできる量のプルトニウムを内諸で運んでいたなんてことがバレたら，それこそ日本は世界中から袋叩きですからね」

天馬「どうすんだ？」

松岡「船を東京に入れることにしました。これホントに内諸ですよ」

天馬「内緒って，なんで東京都知事の俺が聞いていないんだ！」

松岡「だから内諸なんですって。知らないふりしていてくださいね。国家機密なんですから」

天馬「なにが国家機密だ，カッコつけやがって。責任者は誰だ！」

松岡「何言っているんですか，国のやることに責任者なんているわけないじゃないですか」

［……］

天馬「お台場にいるんだったら，それが終わったら来てくれないか？　ここにいる奴らときたら，原発のことなんにも理解してなくてさ，ぜんぜん話にならないんだよ」

［……］

天馬「じゃあ今ちょっと電話で専門家の君から原発がいかに安全なものか，一言いってやってくれよ」

松岡「［スピーカーに切り替えて］えー，では原発の安全性について一言申し上げます。原発は絶対安全です！　大事故につながる危険性は，確率にしますと，分子を一とするその分母は天文学的数字になります。すなわち，危険性はかぎりなくゼロだということになります，以上。わたくしはこれで失礼します」

（00:33:52-00:37:15，強調引用者）

多分に戯画的に描かれているこのシーンにおける松岡のセリフには，絶妙な真理が射抜かれている。松岡が懸念しているのは，プルトニウムを運送することにともなう危険性ではない。そうではなく，「他国からどう思われるか」だけである。すなわち“原子力安全委員会”なるものを象徴している松岡にとって，悪や不正義は「目に見えなければ」それは善や正義となんら変わらないのである。さらに「国のやることに責任者なんているわけないじゃないですか」という松岡の言葉は，逆説的にも，わたしたちの心のどこかにまさしく「わが国」への根拠のない信頼があることを照らし出している。さらに，原発事故が起こる危険性について「確率にしますと，分子を一とするその分母は天文学的数字になります」という表現には，「絶対安全」の「絶対」がきわめて危うい基盤になっていることを鋭く指摘している。このように，「誇張」がちりばめられた「コメディ」は，「笑い」の直中におけるわたしたちの真摯さを促す役割を果たしている。

他方で，テレビや映画好きとされている石川・都市計画長がしばしば口にする卑近な例は，抽象から具体への移行を可能とさせている。たとえば石川はゼロエミッションカーについて，「高橋尚子を先導した車ですよ」と説明したり，ゴミの再処理エネルギーをめぐる議論のさなか，「『バック・トゥ・ザ・フューチャーPart Ⅰ』では，プルトニウムで動いていたタイムマシ

ンが，未来から帰ってきたら，燃料がゴミになっていましたよ！」と手ぶり身ぶりを混じえ，ユーモラスに語っている。

日本のすべての原子炉が阪神淡路大震災（1995年）の規模の地震に耐える耐震性をもちえないことが明らかにされた直後に次のシーンが見られる。

大野「ちょっと待ってくれよ，そんないい加減なこと国がやるわけないじゃないか」

津田「そうですかね，阪神高速道や，海砂を使った新幹線のトンネルはこの国の抱いていた安全神話とともに崩れ落ちたんじゃないんですか。らい予防法の隔離政策や，血液製剤や，肉骨粉はどうです？　いままで国民は何度となく国に騙されてきたじゃないですか。これだけの地震大国で，いままで地震による原発事故が起こらなかったことのほうが奇跡ですよ」

佐伯「まさか原子炉が海砂でできているなんてことは……」

（00:44:12-00:44:36　強調引用者）

杜撰な原発の地震対策を目の当たりにしたとき津田・副知事は，過去における国の様々な杜撰な政策をイメージする。イメージは飛び石のように，主体の空洞化した行為の有り様を次々と浮き彫りにしてゆく。そうして「目には見えない」原発の危険性が鮮烈なイメージにおいてそれぞれの心に映し出されてくるのである。

結びに代えて

映画『東京原発』が製作された2002年当時，すなわち，世紀の変わり目に位置するこの時期，すでにエネルギー問題が途轍もない方向に走り出していることにわたしたちは多かれ少なかれ気づいていたはずである。だが科学技術の進歩はわたしたちの想像力の働きを停止するよう仕向ける。まさしく「イメージしないこと」によって，すなわち「考えないこと」によって，それぞれの欲望だけは徐々に加速させつつ，絶望的な未来へと突き進んできたのである。

ところで，『東京原発』に登場する俳優たちのキャスティングを振り返ると，どの脇役も名俳優であることに驚く。だが山川監督はまだ監督歴が浅く，いわば無名の監督であった。そうした山川の書いたシナリオは，それぞれの役者が「ぜひ出演したい」と思えるほど魅力的であったという。すなわちこの映画は，それぞれの配役がそれぞれに“生きる”映画であったわけである。翻って，原子力業界の有り様を見渡すならば，どの人もそれぞれの個性がないことが求められており，個性は公共性の名のもとにどこへともなく消されてゆく。そうして仕事に対する誇りも責任も投げ捨てて生きることになる。

さらに，2004年以降山川監督が映画を撮影していないという事実に，わたしたちはえも言われぬ不気味さを感じざるをえないであろう。「個に映し出される公」はリレーされ，それぞれの現場で花咲くものでなければならない。わたしたちはこの映画を観賞する直中で，想像力と知性が自由に戯れる自らの心の状態に気づかされるであろう。このときわたしたちは，われ知らず公共性へとひらかれていると言えよう。

注

1）『山形新聞』2011年４月７日，第３面，強調引用者。

2）Simone Weil, “Intuitions pré-chrétiennes”, *Œurres Complétes de Simone Weil*, Gallimard, 2009, p.211. シモーヌ・ヴェイユ，今村純子訳「『国家』註解」『前キリスト教的直観――甦るギリシア』法政大学出版局，2011年，84頁。［　］内および強調は引用者による。以下同様。

3）シモーヌ・ヴェイユは，論考「ピタゴラス派の学説について」（ibid., pp.294-293. 前掲書，132-197頁）において，ギリシア科学の現代への再生を試みている。

4）たとえば，シモーヌ・ヴェイユは科学と技術との関係を次のように述べている。「神の慈悲のおかげで数学は単なる技術に貶められない。というのも，技術面からのみ数学に取り組むならば，技術面においてすら成功できないからである。これはロシアですでに経験されていることである。技術は純粋科学とのかかわりにおいて多くのものに応用される。だが余剰として応用されるにすぎず，直接応用することはできない。この摂理的な配剤があるために，低俗にすぎる物質的なものに終始するわたしたちの文明に，理論的で厳密かつ純粋な科学の核が存続しえたのである。この核は，神の息吹と光が差し込んでくる隙間である。もうひとつの隙間は，芸術における美の探究である。さらにもうひとつの隙間は不幸である。これら隙間から入らなければならない。満ち足りた場所から入ってはならない」（ibid, p.262. 前掲書，152-153頁，強調引用者）。

5）アーレントは次のように述べている。「議論を進めるために，君が大量虐殺組織の従順な道具となったのは，ひとえに君の逆境のためだったと仮定してみよう。その場合にもなお，君が大量虐殺の政策を実行し，それゆえ積極的に支持したという事実は変わらない。というのは，政治とは子どもの遊び場ではないからだ。政治においては服従と支持は同じものなのだ」（Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem, Ein Bericht vonder Banalität des Bösen*, R. Piper & Co. Verlag, München, 1964, p.329. ハンナ・アーレント，大久保和郎訳『イェルサレムのアイヒマン――悪の陳腐さについて

の報告』みすず書房，1969年，214-215頁，強調引用者)。

6）この点に関して高木仁三郎（1938～2000）は次のようなエピソードをユーモラスになおかつ的確に語っている。「[……] 日本のプルトニウム政策というのは，あまりにも大量のプルトニウムを分離して突出しているので，海外から相当批判が集まって，釈明が求められました。[……] そのときに彼［日本の外交官］は，日本の政策は余剰のプルトニウムを持たないことにしているということを言うのに，「マイ・カントリーズ・オフィシャル・ポリシー・イズ・ノット・トゥ・ポゼス・エニイ・プルトニウム・サープラス（My country's official policy is not to possess any plutonium surplus.）」という，たしかそんな言い方をしたのです。そこでマイ・カントリーという言葉を使ったのです。[……] 私はせめてアワー・カントリーというように訳すのかなと思っていたのですが，マイ・カントリーと訳すので，王様が自分の国のことを言っているようで，ちょっとおかしい気がしました。[……] どうもここに見られる「我が国の」という意識が，どこかで日本の原子力政策力や「三ない主義」と関係しているようで，私には大変興味深く思えるのです。[……]」（高木仁三郎『原発事故はなぜくりかえすのか』岩波新書，2000年，66-67頁)。

7）Simone Weil, "L'Iliade ou le poème de la force", *Œurres Complètes de Simone Weil*, Paris, Gallimard, 1989, p.245. シモーヌ・ヴェーユ，冨原真弓訳「イーリアス，あるいは力の詩篇」『ギリシアの泉』みすず書房，42頁。

（受入教員　金森修教授）